コロナ禍に負けない、心をつなぐ思い

昨日、夏の甲子園大会に関わる内容を掲載しました。今日も引き続き、高校野球に関わる内容で、この夏、心に残ったことを紹介します。スポーツをとおしてライバル関係を超えた絆を感じるエピソードです。

話は、甲子園出場をかけた奈良県大会の準決勝から始まります。夏の甲子園大会出場２０回を誇る智辯学園を奈良県立生駒高校が７対５で破り、初の決勝進出を果たしました。もう一方の山を勝ち上がり決勝に進出したのは、夏の甲子園大会出場２９回、そのうち優勝２回を誇る強豪の天理高校です。

奈良県大会の決勝は、強豪校か初出場を目指す高校か、大変楽しみな一戦となりました。

しかし、ここでまさかの運命のいたずらが待っていました。決勝戦を前に生駒高校野球部員に新型コロナウイルス陽性者や体調不良者が続出し、生駒高校は登録メンバー20 人から 12 人を入れ替え、初めてベンチ入りした 11 人の選手と共に決勝を戦いました。先発したのは１年生投手で、本大会初出場です。天理高校の中村監督は生駒高校の状況を知っていましたが、「**手を抜く方が失礼。全力で戦え**」とナインに指示しました。その結果、天理高校が 21－0 で圧勝しました。試合終了前に、天理高校の戸井零士主将はナインに「**試合が終わってもマウンドに集らず、淡々と整列しよう**」というニュアンスの声をかけ、試合終了後の整列では、粛々と整列しました。本来ならば優勝して甲子園大会出場を決めた瞬間ですから、大喜びしてマウンド周辺に集まり、ガッツポーズをしたり、歓声を上げたりしたかったと思います。しかし、天理高校の選手は、静かに整列し、試合後の挨拶をしました。

さらに、試合後に天理高校の中村監督は、**決勝に出られなかった3年生との練習試合を生駒高校に提案**したそうです。

こうした天理高校の心遣いに、生駒高校は大変感銘を受け、保護者会が中心となり、甲子園で天理高校が掲げる横断幕の寄贈を決めました。保護者会会長の丹羽さんは「**天理の選手らの思いが心に響いた**」との思いで寄贈しました。下の写真は、その横断幕と、甲子園球場に掲げられた様子です。

新型コロナウイルスは多くの人の夢や希望、想いを奪ってきました。どれだけ多くの人が涙したことでしょうか。この夏、高校野球に限らず、インターハイや中体連、コンクール等、多くの場面で、感染による出場辞退やメンバー変更が相次ぎました。現実は変えることができません。非常に厳しい現実があります。

しかし、感染に負けずに、前向きに生きていこうとする人も多数います。そしてその人たちから、優しさや思いやり、勇気をもらえます。

これからも多くの困難が待ち受けていると思いますが、太宰府西中学校が一丸となって困難に負けず、進んでいけるようにしていきたいと思います。